

四旬節第五主日

2011.4.10

ヨハネ 11・3-7,17-20,33b-45

いつもの年なら、これほどまでには思わなかったでしょうが、今年の四旬節の今日の福音は、私たちには刺激が強すぎます。大震災とそれに伴う津波の被害の中で亡くなられた方々と、そのご家族の方々のことを思うと、今日の福音はこのままそっとページを閉じてしまいたくなります。今日の福音の中にあえて私たちの居場所を探すとするなら、私たちもマリアのように、家の中に座っていたくなります。かつてイエスを我が家にお迎えした時には、マルタが嫉妬を感じたほどに、マリアはイエスのお側近くに座って、おことばに聞き入っていたのです。そのマリアが、今はイエスを迎えに出ることもせず、じっと家の中に座ったままです。それほどに、肉親の死という現実がマリアを打ちのめし、彼女を悲嘆の淵に突き落としていたのです。家の中には、隣近所や知り合いの人たちなのでしょう、多くのユダヤ人が来て、ラザロの死を悼んで、慰めていたと語られています。

そんな嘆きの家からイエスはマリアを呼び出してくださるのです。イエスを出迎えたマルタが戻って来て、イエスがお呼びになっていると告げると、マリアはすぐに立ち上がってイエスもとに行くのです。一緒にいた人々は、マリアが急に立ち上がって出てゆくを見ると、墓に行って泣きたいのだろうと思って、彼女の後を追って着いて行きます。今度は、私たちもその人々に交じって、マリアの後について行きたいと思います。そのようにして、どう処理してよいか分からない心の混乱を抱えたまま、このミサの中で、私たちもイエスのもとに近づきたいと思います。

イエスのみ前に身を投げ出したマリアは「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」と涙ながらに訴えます。マリアのこのことばは、マルタが最初にイエスを出迎えた時に漏らした訴えと全く同じことばです。姉妹であっても性格も異なり、イエスの前であってもその態度の異なる二人が、今は全く同じ嘆きを同じことばでイエスに訴えるのです。

「主よ、もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」マルタとマリアの嘆きです。マリアと一緒に来た人々も、マリアのこのことばを聞いて皆泣いていたと語られています。私たちもマリアとその人々ともにイエスの御前で泣きたいと思います。しかし、私たちのイエスへの訴えは、マルタとマリアのそれとは多分違ったものであるにちがいません。私たちは、「主よ、あなたがいてくださるのに、どうしてこのようなことが起こったのですか」と訴えたいと思います。

マリアと彼女を囲んでいる人々が泣いているのをご覧になった時、イエスは心に憤りを覚え、興奮して、「どこに葬ったのか」と言われたと福音書は語っています。ラザロを墓の中から呼び出されたあの時、イエスは決して平然とそのようなことをなさったのではありません。愛する者たち同士の間を情け容赦なく切り裂く、死の現実を前に憤られたイエスは、悲嘆の中にある人々と一緒になって、泣いてくださるのです。死とその悲しみが繰り返されるたびに、今日の福音に語られているイエスは、私たちとともにいて、死を呪い、私たちの嘆きをご自分の嘆きとしてくださるのです。

「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」今日の福音の中のこのイエスのおことばを、今日の福音全体の中のおことばとしてあらためて受け止めなおしたいと思います。イエスは死者を生き返らせることも出来る神の子として、いわば超然として、このように言うておられるのではありません。ラザロの死に打ちのめされ、悲嘆にかきくれるマルタとマリア、そして彼女たちを囲んで同情を寄せる人々の中にイエスは来てくださって、その悲しみの底に自ら身を置いて、このように語りかけてくださるのです。イエスご自身も彼らの悲嘆に心かき乱されつつ、このように語りかけてくださるのです。マリアも、マリアと一緒にいる人たちも泣いているのをご覧になった時、イエスは心に憤りを覚えられたという、福音書のことばをそのように受け止めたいと思います。あの時、イエスは決して彼らの信仰のなさに対して憤られたのではないと思います。イエスも人間である私たちを襲う、死の理不尽さ、死の無慈悲さに憤りをもって相対し、死によって打ちのめされた私たちのために、私たちとともに泣いてくださったのだと受け止めたいと思います。

けれども、それだけのことだとしたら、イエスもまた、マルタとマリアのところに来て一緒に泣いてくれた他の人たちと何ら変わることはありません。たとえマルタとマリアにとって、イエスが他の誰よりも尊敬し、頼りにしている方であり、そのイエスが来て下さったことが、マルタとマリアにとって何よりも心強かったとしても、それだけでは、マルタとマリアの悲しみは、拭い去られることはなかったことでしょう。イエスがもたらしてくださったことはその先にあるのです。そして、それはイエスだけがもたらすことの出来ることです。

「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は死んでも生きる。わたしを信じる者は決して死ぬことはない。このことを信じるか」とイエスはマルタに問うのです。それに対して、マルタは応えます。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じます。」このマルタの信仰に答えて、イエスは、マルタがその信仰によって望んでいた以上のことをしてくださったのです。墓に葬られてしまっていたラザロを、再びマルタと

マリアのもとに呼び戻してくださったのです。

「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は誰でも、決して死ぬことはない。あなたはこのことを信じるか。」今日の福音全体を通して、イエスは私たちに対しても、マルタに向けられたのと同じ問いを投げかけておられるのです。

ラザロの死によって、これ以上にはない、深い悲嘆のそこに突き落とされていたマルタとマリアが、イエスを迎えることによって自分たちのものすることの出来た喜びを、深い悲しみの中にある全ての人とのために心の底から祈り求めたいと思います。どのような形でイエスがそれをもたらしてくださるか、私たちは知りません。けれども、心底、そのことを祈り求めたいと思います。

司祭館の玄関においてあった、大きな聖書を勝手にお借りして今日の福音の箇所を開いてみたら、そのページには、澤田神父様の字で、「はい、主よ、わたしは信じております。」と書かれた付箋が貼られていました。澤田神父様からの私たち皆に向けてのメッセージとしてこのことをお伝えしたいと思いました。私たちも皆、直ちには受け入れがたい今日の福音が伝えることの前に頭を垂れて、「はい、主よ、わたしたちは信じております。」と信仰を告白したいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高